

## 44 中国伝統医学と道教(第二十三回)

## 「神仙」

吉元 昭 治

道教にはいくつかの構成要素があるが、中に大きな柱として不老長寿の目的達成と神仙説の信奉がある。前者は實際面、後者は理論面でおのの医学と信仰のバックアップがある。今回はこの神仙説にふれてみたい。

神仙とは神人と仙人の合成語で不老不死を得て自由に天を飛ぶものとされ、仙を僊ともかき、軽やかに天を昇るさまをいう。『釈名』では、「仙とは老いても死がなない」こととあり、『莊子』では「神人は貌姑射の山に住み、処女のように若々しく……あるいは龍にのり雲に乗って天上を往来する」。また『山海経』に「不死の山、不死の樹、不死の国、不死の民」などと共に靈山に巫人がいてここを上下に昇降しては薬を採っていると、蓬萊山は海中にあって蜃気楼を見る」と記されている。

また秦始皇帝、漢武帝らは山東省秦山で封禪の儀を行っているが、これは不老長生を祈る儀式だとも言われている。こう見ると神仙説は山岳信仰と関わることがわかる。

『史記』によれば「仙人は渤海の中の蓬萊・方丈・瀛洲の三神山に仙人が住みそこに不死の薬」があるとあって、始皇帝は海で蜃気楼の不思議を見て方士のいう神仙説に強くひかれ徐福などに不死の薬を探させるようになる。この神仙説の由来について考えてみる。

中国の文筆家で抗日派でのちに暗殺される聞一多(一八九九—一九四六)に『神仙考』という著述がある。これによると、神仙説は戦国時代に斉から起ったというのがその斉という国の来源を考えて見なくてはならない。斉とは姜姓で西戎という西方の民で周代、周と互いに姻戚関係を結んだ。殷を破った功により西から東に領地を与えられ中華文明を享受できるようになった。すなわち斉人は西方の羌族の流れと考えられる。こうした観点から春秋時代の『墨子』には「秦の両方の義梁の国ではその親戚が死ぬと薪の上で焼きその煙が立ちのぼるのを見て登遐(天に登る。後ちに天子の死をいう)したといった。

この義梁とは羌族の地であり、火葬には煙にのって天上去り行き永生をえるという思いがあったので火葬が行われた場所は春秋時代の不死の伝説が存在した地方と重なっている。現在の甘肅・新疆一帯であり古代羌族が住んでいたところで、この羌族が建国した齊で神仙説が生まれた理由になる。また羌族の人には病気で死ぬより戦いで傷を受けて死ぬことを願ったという。創から魂が抜けて天に昇って永生をうると考えたことと記されている。(京都市赤山禅院の赤山とは中国西地方民族の信仰で死して魂の帰るところとされている)。

秦の国は初め現在の甘肅省天水市辺りを本貫とし長い間に涓水を下って周が東周となって去ったあと咸陽に都し、短期間に全国制覇をとげたのであった。その原動力となったのはその後背地にあった西域との交流で培われた財力・軍事力である。軍制・貨幣・度量衡・道路・文字の統一にも関わっている。彼が海で見たという蜃気楼は砂漠でも見られたはずであり、さらにあの兵馬俑の兵士の中に西域人の風貌がある者がいるのは何故だろうか。考えさせるところである。

神仙説は、『列仙伝』『神仙伝』を初め多くの神仙物語りがつづき、文学・芸術などあらゆる方面に影響を与えた。

仙人はやせて白髪・長い顎ひげを生し杖をついているという姿でよく表現されているが、空を飛ぶにはまず身が軽く飛揚力がなくてはならない。その原形は羽人といわれるもので発掘物で見ることが出来る。また有翼天人、飛天、天女といったのもその流れであり、我が国に入ると羽衣物語りと、かぐや姫のはなしとなってくる。また身軽さといえば、『神農本草経』の薬効の第一にあげられているのは「軽身」である。

これらをふまえて総会で発表する。

(吉元医院)